九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

海野十三における南方体験 ： 科学小説を視座として

尹, 小娟
九州大学大学院地球社会統合科学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1957706

出版情報：九大日文. 31, pp.15-28, 2018-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

海野十三における南方体験

――科学小説を視座として――

尹 小娟（YIN Xiaojuan）

一　はじめに

一九四二年一月から五月まで、海野十三は海軍報道班員として徴用され軍艦「青葉」に搭乗してパラオ、トラック、ラバウルへ赴いた。この四ヶ月間の徴用体験を題材として書いた作品が従軍日記『赤道南下』（大日本雄弁会講談社、一九四二年一二月）、エッセイ集『ペンで征く』（日本放送出版協会、一九四二年一二月）である。敗戦後は南方体験をもとに創作した作品がほとんどないためか、海野の南方徴用に関する研究はまだ十分なされていないのが現状であり、現時点で見られるのは吉川麻里氏の「海野十三の南方徴用体験――科学力の罠」（木村一信、神谷忠孝『南方徴用作家　戦争と文学』世界思想社、一九九六年三月）のみである。

吉川は「あまりに過酷で重い現実が小説家海野の科学者としての顔を切り裂いたのである。彼は科学者である以上に愛国者であった」[1]と指摘している。だが、海野の徴用前の思想、南方滞在中の出来事が作品の中でどう反映されているか、そして戦後の作品にどのような影響を与えたのかなどの問題は依然として残る。本論文は徴用中に海野が書いた『赤道南下』と『ペンで征く』だけではなく、戦前の作品と戦後の作品をも視野に入れて、それらの作品群を辿りながら、海野十三の南方体験の意味と海野文学における位置付けを探ってみたい。

二　科学者と愛国者、二つの顔から見る戦争

一八九七年、海野は徳島県の藩医の家に長男として生まれた。父の仕事の関係で転居した先で神戸一中に進み、早稲田大学で無線電信学を学び、卒業後は逓信省電務局電気試験所で真空管の研究をしていた。一九二〇年代後半から作家として活動し始めた海野は科学者としての知識に裏打ちされた軍事小説で人気を博し、軍とのつながりを持つようになり、海軍の作家徴用の母体となる海軍外郭団体のくろがね会と深く関わるようになる。一九四一年八月一七日の「東京朝日新聞朝刊」に「くろがね会愈発足」というタイトルで次のような記事が掲載された。

> 海の護り、海洋知識の普及徹底が叫ばれてゐる折柄、大下宇陀児、海野十三氏らが音頭をとつて大衆と密接な接触をもつ作家の間に「くろがね会」が設立され、十六日午後五時半から赤坂幸楽で設立経過報告会が開かれた。
>
> 同夜は海防義会の上田海軍中将海軍省田代中佐をはじめ作家および関係者約四十名が参集、差し当り来月十日盛大に結成式を挙行することになつた。

くろがね会の活動に関して、今のところ確認できるのは、「海軍報道班作家前線記録」というシリーズとして博文館から出版された『進撃』（一九四二年一二月）と『闘魂』（一九四三年二月）のほか、月刊誌「くろがね会叢書」の編纂刊行がある。『進撃』に海野の「南海戦塵日記」、『闘魂』には「この目で見た海鷲の強さ」が載せられている。一方、「くろがね会叢書」は合計で二七輯が発行されたが、国内の図書館でも所蔵は数えるほどであり、全二七輯の全貌を把握するのが難しい。現時点で確認できるのは第五、十、一二、一三、一四、一五、一七、一九、二〇、二一、二二、二三、二六と二七輯であり、その中で、海野の作品は第十輯（一九四三年十月）に「不思議な黄嬢」、第二七輯に奇想・科学小説輯として「見えざる敵」「軍用鮫」「時間器械」「スパイ学校の卒業試験」「特許多腕人間方式」と「第四次元の男」という六篇が収録されている。「くろがね会叢書」巻頭で「本書は海軍省恤兵部及び報道部の直接指導の下に、海軍省外郭団体「くろがね会」の編纂した前線読物です。皆様の戦陣の余暇を幾分でも御慰め出来れば誠に幸甚です」と書いてあり、また表紙に「海軍軍用図書　海軍部外持出厳禁　不許部外配布閲読」と記載されており、海軍内部の雑誌だということがわかる。

さらに、南方より帰還後の一九四三年末、海野の主導のもとで、海軍報道班文学挺身隊が結成され、「くろがね会」と提携して、「戦友愛に基く同志的結合のスローガン」の下に、海軍の要請に応えて文学の分野で協力した。ここで海野は従軍報道に対して多分に意欲的な姿勢を見せている。一九四一年秋、海野のところに徴用令書の「白紙」がやってきた。『軍艦旗の下に』（偕成社、一九四三年一一月）で海野はその時の心情を次のように回想している。

> ああ、ずいぶん待った。しかし待ったかいがあった。私のような作家も召されたのだ。そして戦地へやってくださるのだ。海軍の一員として、勇ましく出陣する光栄の日が、ついにほんとうに来たのだ。私は、白紙をうやうやしくおしいただいて、家内といっしょに座りなおし、はるかに皇居の方にむかい、感激の涙とともに、うやうやしくおじぎをいたしました。(2)

徴用されることへの感謝と光栄の気持ちは、上記のような公に出版された作品に見られるだけではなく、徴用中の妻宛ての書簡にも繰り返し現われる。一九四二年一月一日、海野は東京駅を出発し、四日付けの手紙の中で次のように書いている。

> きのうも満員電車の中で思ったことだが、私よりも若い人がたくさん乗っていた。また、立派な紳士もいた。この多くの人たちに先んじて私が択ばれ、第一線に派遣されるということの如何に光栄にして、責任重大なるかを痛感した。家門の誉とは、このことであろう。（中略）祖先の血は、今私の脈管に沸々として溢れ、たぎりつつある。上、陛下の

御楯として、又下っては何百人何千人、否、何万人という多くの国民の楯となって征く身は蓋し、誉の一字に尽きる。今こそ武士の裔らしく戦ってくるぞ。(3)

以前から海軍戦争に積極的に関わっていた海野は徴用を光栄と受け止めており、ここには愛国者としての姿が読み取れる。一方、科学研究者という経歴を持ち、科学小説家として作家の活動を始めた海野は、科学力の重要性を様々な場面で強調している。『地球盗難』の「作者の言葉」(ラジオ科学社、一九三七年四月)で、科学力について次のように述べている。

国際関係はいよいよ先鋭化し、その国の科学発達の程度如何によってその国の安全如何が直接露骨に判断されるという驚くべくまた恐るべき科学力時代を迎えるに至った。(中略)世界列国は今や国防科学の競争に必死であり、しかもその内容は絶対秘密に保たれてある。いよいよ戦争の蓋をあけてみると、いかに意外な新科学兵器が飛び出してくるか、実に恐ろしいことである。開戦と同時に、戦争当時国は手の裡にある新兵器をチラリと見せ合っただけで、瞬時に勝負の帰趨が明かとなり即時休戦状態となるのかもしれない。(4)

戦争は科学力次第だという海野の当時の主張が読み取れる。また、一九三七年開催された「科学者ばかりの未来戦争座談会」(『新青年』一九三七年八月号)で、海野は司会者として、未来の戦争、新兵器などの話題をめぐって五人の各分野の博士と議論した。新兵器に関して海野は「だから結局そういう新しい兵器が一つあれば勝ちですね」と言っている。戦争の勝負、あるいは国家の未来を科学力に託すこうした主張は、彼の徴用前の少年向け科学小説「浮かぶ飛行島」(『少年倶楽部』大日本雄弁会講談社、一九三八年一月〜一二月)、「太平洋魔城」(『少年倶楽部』大日本雄弁会講談社、一九三九年一月〜一二月)や「地球要塞」(『譚海』一九四〇年八月〜一九四一年二月)を貫いている主題でもある。

ここで一つの問題が浮かび上がってくる。これほど科学力の重要性を訴える海野は、当時の日本の科学力をどのように考えていたのか。ここで注目したいのは「浮かぶ飛行島」、「太平洋魔城」と「地球要塞」という三つの作品では、いずれも新しい技術を持つのは他の国、あるいは地球外の生物であり、日本は攻撃の対象だということである。言い換えれば、日本は敵からの攻撃を防御する側である。このような設定はもちろん戦時中の日本が主張していた「自衛のための戦争」という考え方に重なっているが、科学研究の経歴をもっている海野が、日本の科学力の後進性にある程度自覚的であったことも理由として考えられる。例えば「太平洋魔城」で、ソ連の共産党太平洋委員長ケレンコが日本を攻撃する理由を次のように述べている。

われわれは日本をのっ取るために、おどろくべき熱心さで長い間共産主義の思想をふきこんで来た。が、無駄であっ

た。君等のいう日本精神は、びくともせず、この方法によるわれわれの計画は、完全に失敗してしまった。やはり、武力戦よりほかはない。(5)

日本人の精神があまり強いために、武力で攻撃しなければならないというソ連の長官の口を借りて、海野は日本精神を称賛している。しかし、武力戦となると、海底要塞を持ち、しかも恐ろしい新兵器で武装しているソ連に対して、日本には勝ち目がない。結局、主人公と仲間たちが石油を利用し、大爆発を引き起こして海底要塞を破壊し、日本を守ることに成功する。このように、日本の危機の回避は科学力ではなく、主人公たちの機転によってなされる。海野は小説の結末で次のように書いている。

日本の将兵はつよい。軍艦もすばらしい。しかし、これだけでは十分でない時代となった。太平洋の平和を永久にたもつには、どうしても正義の国日本が、今までにない科学兵器を発明することが大切である。(6)

また、『浮かぶ飛行島』(大日本雄弁会講談社、一九三九年一月)の「作者の言葉」においても、将兵の精神より科学力の重要性を強調している。

科学力がすぐれてゐなければ、どんなに立派な大和魂があつても、どんなに大きな経済力があつても、これからの戦争には勝てません。ですから私は、これからの日本人である皆さん方によくお願ひしておきます。どうかこの作中にあらはれる浮かぶ飛行島よりも、もつと〳〵立派な科学兵器を皆さんの手で造つて下さい。(7)

戦争に勝つためには精神の強さより科学力だという、海野の戦前の主張がここでも明確に示されている。

こうした愛国者と科学者という二つの顔を持ちながら、一九四二年一月海野は南方へ発った。それまで戦争に関する作品を多数書いていた海野は実際の戦場で何を見、何を感じたのだろう。

三　徴用中における分裂

海野は徴用令書を受け取った時、光栄の気持ちを抱くとともに、「征けば再び帰るまいと覚悟を決め」(8)たという。こうした覚悟の上で、海野は体調不良の中二十四篇五百六十枚に達する報道文を書いて大本営海軍報道部へ送った。また、帰還後間もなく、海軍報道班員の具体的な仕事について、これから戦地へ出発する徴用作家の参考ために、「報道班員の作家」(「くろがね会」一九四二年七月)を書いた。海軍従軍作家の仕事は「特別陸戦隊についていて攻略戦や掃蕩戦に出たことと、軍艦にのっていて出撃したことと、占領地にいて掃蕩戦や防衛戦を

やっていたこと」[9]と述べ、また「作家たるものは、帰還後ゆっくり小説化する等のことによって任務を果たせばいい、という考えだけでは足りないのであって、出来るだけ速かに、報道文その他を以て自分の読者に呼びかけ、これを国策に向って奮い立たしめることが、報道班員としての一つの重大なる仕事なのである」[10]と書いている。実際に、南方徴用中の海野は艦内で海軍兵士と一緒に生活し、一緒に戦地に入り前線の様子を自分の目で見て作品の中に書いている。

一九四二年一月二三日、オーストラリア陸軍と激しい戦闘が行われ、海野は海軍兵士に守られてカビエンに上陸した。かなり短い時間で上陸に成功したことに対して、海野は「豪州軍の弱さ」[11]をあらためて確認し、上陸後、島民たちが「ニッポン、バンザーイ」と叫びながら、日本軍を歓迎する光景を目にする。こうした経験は、海野に日本の勝利を確信させた。二月六日に妻への手紙の中で「戦況は、だんぜん皇軍の勝ちで、敵はゲリラ戦を大仕かけにやるくらいに止っています」[12]と書いて、日本の軍事力に多大の信頼を寄せている。

南進についても、当時の海野は「南進とは、〇〇を占領し、〇〇諸島を制圧し、そして鯨の海、南極に達したときに、初めて南進したといえるのである。このラバウルに来たことは、ようやく地球の真中に顔を出したというだけのことで、これを南進というのはあたらないぞ」[13]と述べて、南方進出の野心を示している。「ビスマルク諸島攻略記」におけるある司令官の言葉は、この野心を実現するためには科学力が不可欠であるという海野の思想を代弁したものといえる。

これからの日本人は、大いに勉強して常識を持たねばならぬ。殊に、高度の科学知識を持つようにしなければならぬ。そうすることによって、初めてこの資源は日本人のものになることを約束されるのだ。そして日本人の知識の水準が全体に高まれば、そこに初めて多民族の指導者としての実力が備わってくるわけだ。大いに科学知識を取り入れて貰わねばならぬ。[14]

しかしながら、三月末からオーストラリア機に入れ替わって、「空の要塞」と呼ばれるボーイングB―17型の超重爆撃機を持つアメリカ軍が攻撃してきた。従来新兵器に興味を持っていた海野はこの「空の要塞」をよく知っており、報道文「この眼で見た海鷲の強さ」（『新青年』一九四二年七月）でこの新兵器を次のように紹介している。

「空の要塞」は、米国軍としては安全この上ない不撃墜機として自慢のものであった。ということは、いくら機銃で撃たれても、機体に孔ができない。普通はガソリン槽を撃たれると孔があいてガソリンが漏れはじめる。それに引火して飛行機は火達磨になる。ところが、「空の要塞」のガソリン槽は機銃で撃たれると、もちろん機銃弾はガソリン槽を撃ち貫くが、弾がその槽の壁体を貫通し終ると途端に

その孔が内側からぴたりとふさがってしまう。そういう仕掛になっている。[15]

敵軍の新兵器をここまで詳しく描くことからも、海野の軍事と科学に対する情熱を垣間見ることができる。しかし、この「空の要塞」を、作中で日本の海鷲は撃墜する。

ところが、わが海鷲はこれに追いついて、ちゃんと撃墜した。一度や二度でない。追いついたが最後、毎回ちゃんと撃ち落としている。敵の方では、そんな筈はないがと首をひねっていることであろうが、事実じゃんじゃんと「空の要塞」は撃墜せられているから、敵の基地に帰ってくる数は減っているのである。

わが海鷲勇士の猛攻ぶりはものすごい。一度でいかなければ、敵の機銃弾の雨下集中をものともせず、なおも喰い下がって、二撃三撃と加え、必ず墜している。「空の要塞」の下から〇回機銃弾で突き上げて、これを撃墜したという念の入った功名談もある。こうしてラバウル来襲の敵機は、わが海鷲に追いかけられ、大体十七分後から四十分後までの間に撃墜されていたのであった。[16]

日本側が具体的にどのような新戦略をとり、どのような新技術を利用して撃墜したのかに関する記述は非常に曖昧であり、それに代わって兵士たちの「猛攻ぶり」を強調し、まるでこうした精神上の強さで敵の新兵器「空の要塞」を撃墜したかのように記している。

こうした発言は、一九四三年七月くろがね会が編集した『日本海軍の話』（四方木書房、一九四三年七月）での発言と一致している。

ではそんなにも日本の飛行機はすぐれてゐるのかといふとさうではありません。英国の「スピットファイヤー」米国の「P三九」などと来てはそれこそ立派なもので、そんなものに比べたら海軍の〇〇戦闘機にしても、陸軍の隼号などにしても、戦には勝ってゐますが、英国のや米国のにくらべては決して勝れては居ないのです。それだのに、どうしてさうわけなく勝つのかといふのに、それが前にもいつたやうに日本人としての乗つてゐる人の気力と腕前が非常にすぐれてゐるからなのであります。日本人が世界の人種の中で一番戦闘機の空戦に好いと言ふことが今度の戦争で証明されたことは実に将来の日本のため愉快なことではあります。[17]

『日本海軍の話』の「海軍の訓練」という章の中で、海軍兵士たちの訓練の厳しさ、そして何よりも海軍精神、いわゆる「心の訓練」の重要性を強調している。海野はその他多くの報道文の中で、日本兵士の辛抱強さに繰り返し言及している。「ペンで征く南方戦線」（『東京日々』一九四二年五月二二日）の「世界一の

我慢強さ」という節では、艦内生活の猛烈な暑さ、まずい食事、不眠、皮膚病などの過酷な日常が描かれ、兵士たちにとって闘うべきものは敵兵だけではないと述べ、結末で「結局実際には、忠誠なる日本人の持つ世界無比の辛抱づよさが、常に最後の勝利を掴むのだといっても過言ではない」[18]という。従軍日記『赤道南下』（一九四二年一二月）にも「この辛抱強さと謙虚さによって、帝国海軍は遂に勝ったのだ。」[19]と科学者としての立場を捨てて、精神主義に走ってしまったような発言がある。この時期に、海野の科学者と愛国者という二つの面の調和が崩れ始めたと言えるだろう。

愛国者としての海野は日本の勝利を信じ込んでいただけではなく、「黒色の新皇民と宣撫の問題」（『大洋』一九四二年七月）で宣撫の重要性と緊急性についても強調している。「黒色の新皇民と宣撫の問題」の中で海野は、原住民たちが英人宣教師に対して大なる畏敬の念を払うことを指摘し、原住民たちの心を捕まえるために、宗教は一つの利器となると主張する。もし英人教会と英人宣教師とに代わって、日本から宗教団体が行って宣撫の仕事をするとしたら、どの宗教がいいかという問題に対して、海野は「仏教か天理教か、それとも回々教か、日本キリスト教か」[20]と考えをめぐらせる。また、原住民たちに以前より幸せだと感じさせるために、「日本に於けるあらゆる文化力を動員して、彼等をして驚異の眼を瞠らしめねばならない」[21]と考える。この「文化力」を示すために具体的にやるべきこととして、海野は様々な提案をしている。例えば、彼等の部落を電化してやること、アイスクリームの製造機械を与えること、また能狂言とか紙芝居のような簡単な見世物を見せること、フットボールとテニスを教えることなどである。

原住民たちは現在日本軍を信頼して軍政に協力しているが、近い将来において、本当に彼等は日本の新皇民となるのだろうか。あるいは失望して、昔の英人の政治を懐かしがるかもしれない。一日でも早く原住民の信頼を得るべきであるとして、海野はこれらの提案を行っている。しかしながら、仏教や回々教など本来まったく相容れない宗教を同列に並べ、また「文化力」としてフットボールやテニスを挙げるこの文章に、合理性を求める科学者としての海野姿を見出すことは到底不可能であろう。

それとほぼ同じ時期、海野は本名の佐野昌一の名義で「南太平洋科学風土記」（『科学知識』一九四三年四月号～五月号）を連載した。「はしがき」で海野は「題して南太平洋科学風土記といふが、実は私が報道班員として南太平洋に勤務してゐた時に見聞したあちらの事情を、科学の目を通じて思ひ出すままにくり拡げようといふのである。余り戦闘や作戦とは関係のない至極のんびりしたものになるかもしれないが、これは戦闘報道記ではないのであるから、そのつもりでお読み捨て願ひたい」[22]と述べている。この作品の各章の章題「船酔ひ」「海の色」「船と暑さ」「船と風呂」からもわかるように、南方の自然や慣習を科学者の目でまとめたものである。これは掲載誌『科学知識』の科学専門誌という性質にも関わっているかもしれない。だが、

海野がこの作品のみ、本名で発表している点を見逃すべきではない。同時期に発表した報道文が全て海野十三名義であることとあわせて考えると、彼は作品を創作する際に、意識的にこの二つの顔を使い分けていたのだろう。つまり、冷静に物事を捉えて合理性を求める科学者の佐野昌一と、戦争へと突き進んで行った日本を愛し日本の勝利を願っている一国民の海野十三がいる。

このように、アメリカの新武器をその目で見て、南方徴用後期から日本の科学力の不足という現実を理解し始めていた海野は、科学者と愛国者という二つの立場の両立を放棄し、科学者としての側面を隠しはじめる。以前は戦争の勝利を「科学力」に託すと信じていたが、アメリカ軍の新技術と新兵器を知った徴用の後期から、兵士たちの「辛抱づよさ」が戦争の勝負を決めるという非科学的精神主義に走ってしまった。こうした二つの立場の分裂による苦しさが敗戦後の作品の中には窺われる。

四　戦後の反省と創作

一九四五年八月六日、アメリカのB―29少数機が広島に原子爆弾を投下したが、当日の大本営は「新型爆弾」だと発表した。海野は「もともとアメリは科学技術について一流の国であ」ることを知っており、新兵器を導入することは「予想された事であって、今さら驚くに当たらない」[23]と八月九日の日記に記している。まだ「新型爆弾」が原子爆弾だと知らず、敗戦の気配も感じていなかった。日記の中で次のように書いている。

それと正面から取組み、それぞれの工夫において被害を最小限度化すべきである。政府及び軍部に対して希望するのは、よろしく士気を昂揚するようなことをやってもらいたいことである。たとえばB２９を国民の目の前で撃墜するが如きことである。[24]

ところが十日、アメリカ大統領トルーマンが演説で爆弾は原子爆弾だと言明すると、海野は当日の日記で「戦争は終結だ」[25]と記し、日本が戦争に負けたことを認めざるを得なかった。その日の内に一家心中を決心し、遺書も作成したが、作家湊邦三の説得や、青酸加里の入手が困難であったため思いとどまる。[26]海野は八月二六日の日記で「海野十三は死んだ。断じて筆を取るまい。口を開くまい。辱かしいことである。申し訳なき事である」[27]と述べている。注目したいのはここの「海野十三」をどのように理解すべきなのかということである。前述のように、彼には「愛国の軍国主義者の海野十三」と「科学者の佐野昌一」という二つの身分があり、ここで死んだのは前者だと考えられる。これまで日本の勝利を信じ込んでいた彼にとって、敗戦と同時に自らの精神の基盤が失われ、もはや今までのように「海野十三」という名義で続けて作品を書くことはできないと考えたのであろう。実際に、敗戦後の多くの作品は「丘丘十郎」というペンネームで発表している（ただし、単行本出版する時は海野十

三に戻っている）。敗戦後の彼に残されていたのは科学者という立場のみだったのであり、そのことは彼の戦後の作品の端々からうかがうことができる。

敗戦二カ月後の一九四五年一一月、海野は「丘丘十郎」名義で『富士』に戦後初の短編小説「大脳手術」を発表する。自分の体の部品が自由に売買される世界で、ある男が金のために自分の器官を一つずつ売り飛ばし、その代わりに安価な器官を移植する。結局、男はゴリラとなり果て檻の中に入れられてしまう。実際はこれらはすべて、戦時中に残った弾片のために、脳髄にうけた圧迫障害による男の妄想である。だがたとえ妄想であっても、戦争による障害のために自らの体の部品を一つずつ売ってしまう男の姿は、戦時中自分の科学者としての立場を徐々に失っていった海野を連想させる。以下の男の言葉は海野の代弁だといってもいいだろう。

> 或るとき、私は図らずも一つの問題に突当った。それは外でもない。こうして容貌も変り、声も変り、四肢から臓器までも変り果てた現在の私は、果して本来の私といえるかどうかという問題であった。（中略）ああ、恐ろしいことだ。私はとんでもない過誤を犯した。自己を愛するためにあんなにまで苦労を重ねながら、知らず識らずのうちに、それと反対に自己を破壊し尽していたのだ。[28]

戦争によって自分の科学的合理精神を否定した海野も、「知らず識らずのうちに、それと反対に自己を破壊し尽して」おり、男との類似性を見出せる。前に述べたように、彼は「海野十三は死んだ」と書いて、戦時中の軍国主義者の自分は死んだと宣言した。同年一二月三一日、彼は日記で「我が途は定まれり。生命ある限りは、科学技術の普及と科学小説の振興に最後の努力を払わん」[29]と記している。これからは科学者として作品を創作しようとする彼の決意は敗戦後初のエッセイ「原子爆弾と地球防衛」（『光』一九四五年十月）からも窺われる。

この中で海野は戦争と各国の科学力を論じ、地球人類の未来などの問題をも扱っている。八月六日に投下された新型爆弾は原子爆弾だと知ったときの、海野の反応は次のようなものである。

> 率直に告白すれば、アメリカが原子爆弾の製作に成功したと知ったとき、私は敵味方の関係を超越し、広島の惨害をも超越し、科学技術史上画期的なるこの成功に関しアメリカに対し祝意と敬意とを捧げざるを得なかった。そして又たいへん羨ましく感じたことも告白せねばならない。[30]

終戦後の日本にＧＨＱによる検閲があり、上の引用も検閲を意識しながら書いたのだと考えられるが、海野の本音でもあると思われる。物理学知識を持つ海野は、原子爆弾は理論上は成立の証明が終わり、あとはこれを如何にして技術化するかの問題のみとなっていたことを既に知っていた。ただし、彼は「航

空機の発達の過程等から考えて、まず三十年後と」思っていたという。わずか二十四年しか経っていないうちに実現できたことへの驚きや、科学者としての喜びは事実だと思われる。一方、戦時中の日本の科学力について海野は次のように述べている。

> 敗戦前、否、大東亜戦争勃発当時のわが科学技術界の動脈硬化乃至痴呆性症状は正しく三等国相当であったことは、われら斯界に呼吸している者にはよく分っていたことであって、政府や軍部が日本は一等国だという宣伝をなし、赫々たる勝利を讃うるに拘らず、われらは始めからこの戦争の前途に横たわっている大困難を算定していたのである。そしてそれは今日、敗戦という事実によって、極めて明瞭に証明せられた。(31)

戦争中はすでに日本の科学力の後進性が分かっており、勝つのが難しいと思っていたと述べている。日本は必ず勝つという戦時下の主張と上の引用、どちらが本音、どちらが建前というよりは、これを海野の戦時下における二つの面の分裂による矛盾として捉えるべきだと思われる。前述したように、太平洋戦争勃発当時、あるいは南方へ赴く前の海野の作品から見ると、彼は日本の科学力の後進性にある程度自覚的であったことが読み取れる。しかし、徴用前期の日本軍が戦争で示している強さ、順調に進んでいる占領、これらが彼の科学者としての面を覆い隠していた。徴用後期、日本軍事力の真実を知った彼は矛盾を感じながら、やむを得ず軍国主義に走ったのである。戦後になって振り返るとき、海野は戦時下の自分の軍国主義的な言説を避けて、日本科学力に対して疑問を持っていたことだけを述べている。これは敗戦後の情勢から考えれば、納得できるだろう。

また、海野は「原子爆弾と地球防衛」でもう一つの課題、「地球防衛問題」を取り上げる。アメリカにおける原子爆弾の成功は将来、全人類にどのような影響をもたらすか、我々はどのように行動すべきかなどの問題を提起する。海野自身の結論は以下のようなものである。

> 私はここで私の結論を先に掲げる。すなわち、原子爆弾の実現したのを機会として、全世界はお互いの間に於ける一切の戦争を永久に終局とせねばならぬ。そして全世界は一致団結して協力し、地球防衛の一目標に精進せねばならぬ。地球防衛とは何か。それは地球の敵より地球人類を護ることである。地球の敵とは何か。それは他の遊星に棲息する生物で、われら地球を狙う者共のことである。(32)

「全世界は一致団結して協力」し、地球外知的生命から我々地球人類を護るべきだということが敗戦直後の海野の「地球防衛問題」に対する考えである。

海野は戦前から地球外知的生命を作品の中で登場させていた。一九三九年から一九四〇年にかけて『小学生新聞』に連載された「火星兵団」は侵略者としての火星人が地球人を捕虜に

しようと襲来し、地球人がそれに対抗する話である。この作品の中で、火星人は基本的に「敵」として描かれ、地球人が生存のために戦わなくてはならない状況で、両者は共存することが不可能であり、どちらか一方のみが生き残るという状況にある。小説の結末で、「蟻田博士」という科学者が開発した武器によって地球は救われる。海野は作品の中で蟻田博士の言葉を借りて科学力の重要性を強調している。

「これからは、火星人と競争することになるから、われわれ地球の人類は、これまでよりも、勉強をしなければ、大宇宙の指導者の地位を、火星人にとられてしまうよ。勉強だ、大勉強だ」蟻田博士は、拳をふりながら言った。(33)

注目したいのは、この作品の中で「われわれ地球の人類」のような言葉はよく出ているが、実際に各国がどのように対策を模索していくかに関する記述はほとんどないことである。「地球防衛問題」にもかかわらず、地球人の連帯感には言及していない。海野は「『火星兵団』作者の言葉」で次のように述べている。

われわれ日本民族は、地球人類の先駆者として立ち、やがては地球全土を指導し、そしてまた大宇宙をも支配するという大きな希望を目標に、うんと勉強し、そして強く鍛えねばなりません。(34)

地球人が火星人と対抗する小説にもかかわらず、全人類のためという意識が見られない。それは当時の国際情勢とも関係があると考えられ、各国が協力して同じ目標に向かっていくことを書くのは難しかったのだろう。

敗戦後、海野の「地球防衛問題」に対する見方は原子爆弾の実現で変わっている。一九四五年九月、同じ地球外知的生命を題材とした小説「地球発狂事件」を丘丘十郎名義で『協力新聞』に連載し始めている。火星人を残酷な敵として描いていた「火星兵団」と違い、この作品に登場する知的生命は作品の最後になるまで謎のままであり、理解できない生物である。アイスランドで巨大な船が発見され、それを記者や学者が調査した結果、事件を起こしたのは大西洋の海中に基地を作っていた知的生命であることがわかる。地球人は対策を考えるが、有効な手段はなく、結局その知的生命はただ偶然に地球に着いただけであることがわかる。そしてある日彼らは突然姿を消してしまい、小説は終わる。

この作品で注目したいのは、未知の存在に対して、「全世界」が一丸になって対策を考えるところである。アメリカの上院議員は「地球防衛はわれら世界人類の義務であると共に権利である。地球外よりの無断侵入者に対しては何の仮借するところがあろう」(35)との見解を発表している。そのとき、「現代の最強武器である原子爆弾」の使用も検討されるが、結局「平和的な外交手段」――音楽を採用することになった。これまで論じてき

た戦前の小説と違い、未知の存在に対しては武力ではなく、音楽という文化的な手段を利用して平和的関係を築こうという意識が現れ始めている。作品の最後で、海野は次のように書いている。

> 果たして然らば、地球人類がお互い同士に猜疑し、落とし合い、殺戮し合うことは賢明なることであろうか。断じて然らず。われら地球人類は、そういう一切の同胞相食むの愚を即刻捨て去らねばならないのだ。そして直ちに地球防衛の旗印の下に協力し結束し、彼等を迎える準備を急いで始めなければならないのだ。それは必ずしも戦備ではない。いや、戦備よりもむしろ平和的交渉の方法と手段とを研究し用意することになる。地球の上に人類相斃し合う戦争が永遠に封鎖されなければならないと同時に、大宇宙にもまた宇宙戦争を生ぜしめてはならないのだ。(36)

日本人、デンマーク人、アメリカ人などの多様な国の人間を登場させており、平和時代を迎え、国際的視野に立って書いているこの作品における「地球人類は一つ」という海野の考えが見受けられる。ただし、この作品における「平和的交渉」はあくまでも地球人類の一方的な考えであり、未知の存在に真正面から接することがないまま物語が終わってしまう。

海野は一九四五年一二月から一九四六年一一月まで再び丘名義で「火星探検」を『サイエンス』に連載している。宇宙人が「敵」、あるいは「未知の存在」として描かれてきたこれまでの作品と違い、「火星探検」における火星人は「友人」である。舞台はアメリカに設定され、登場人物は中国人の張、日本人の河合と山木、そして黒人のネッドという多国籍なメンバーの少年四人である。アメリカを旅していた四人が偶然火星に行き、そこで地球人と大きく姿が異なる火星人と遭遇する。彼等とは度々険悪な関係になりかけるが、少年たちは地球の音楽をきっかけに火星人と平和的な関係を結ぶことに成功する。

音楽を通じた地球外知的生命との交流は「地球発狂事件」でも見られるが、「地球発狂事件」ではあくまでも計画にとどまり、「火星探検」では実際に実行している。瀬名堯彦は解題で「火星探検」では「従来の作品に見られた火星人との戦闘がなく、地球人との友好関係が強調され、文明的にも地球の方が高い状態に設定されている点が、旧作との大きな相違であった」(37)と述べている。

海野は作中で、火星人の科学力は地球人より進んでいるとしており、戦前の作品における「戦争は科学力次第だ」という主題を捨てて、そのかわりに平和を強調している。地球人が火星の資源を奪うために襲ってきたのではないかという火星人の疑問に対して、海野は少年の一人山木に次のように語らせる。

> そのことも、あなたの誤解です。なるほど地球の人口は多いです。またこれまでに地球上には戦争もたびたびありました。しかし今はもう侵略戦争は根だやしになりました。

そのわけは、戦争の惨禍というものが、負けた国の人々にはもちろんのこと、勝った国の人々にもふりかかってくることが分り、戦争は地球上のすべての人々に大きな不幸をもたらすことがよく分ったのです。だからもう戦争には懲りて、どの国でも戦争を起こすことはやめたと宣言しているのです。この万世の太平が来たのです。この万世の太平は、地球の上だけのことでなく、惑星と惑星の間にも約束されねばなりません。(38)

終戦後、世界各国が戦争のない理想的な未来のために努力する国際情勢での、海野の戦争への反省の気持ちがうかがえるだろう。また火星人という他者を「共存できる仲間」として捉えることは、終戦直後、アメリカ軍の進駐による人々の不安を取り除くところで役に立っていると考えられる。

五　結び

本論文は海野十三の南方徴用体験に着目し、徴用前の科学者と愛国者という二つの面を確認し、戦争に勝つためには精神の強さより科学力だという主張を究明した。海野は徴用前期の状況に、戦争に対する自信を与えられ、「戦争は絶対にわれわれの勝ちである」(39)と信じ込んでいたが、徴用の後期からアメリカ軍の新技術と新兵器を知ってからは日本の科学力の不足の現実を認めざるをえなくなり、戦争の勝負を決めるのは科学力より精神上の強さだという非科学的な精神主義に走ってしまった。終戦後、海野は戦時下では捨てられていた科学者の顔を再び取り戻して、軍国主義者の「海野十三は死んだ」と宣言する。また海野は原子爆弾の実現を機に、地球防衛問題を作品の中で取り上げているが、戦前の同じ題材の作品と並べて考察してみると、海野が描いた地球外知的生命は戦前の「敵」から、戦後の「友人」へと変わっていることがわかる。

【注記】

1　木村一信、神谷忠孝『南方徴用作家　戦争と文学』（世界思想社、一九九六年三月）197頁
2　「軍艦旗の下に」『海野十三全集　別巻1』（三一書房、一九九一年十月）78頁
3　「戦地から妻へ」『海野十三全集　別巻2』（三一書房、一九九三年一月）114頁
4　「『地球盗難』の作者の言葉」『海野十三全集　別巻1』394頁
5　「太平洋魔城」『海野十三全集　第6巻』（三一書房、一九八九年九月）454頁
6　「太平洋魔城」『海野十三全集　第6巻』505頁
7　『浮かぶ飛行島』（講談社、一九七〇年五月）3頁
8　「筆者の言葉」『ペンで征く』（十三舎、二〇一一年七月）277頁
9　「報道班員の作家」『ペンで征く』233頁
10　「報道班員の作家」『ペンで征く』236頁
11　「ビスマルク諸島攻略記」『ペンで征く』30頁

12 「戦地から妻へ」『海野十三全集　別巻2』119頁
13 「ビスマルク諸島攻略記」『ペンで征く』42頁
14 「ビスマルク諸島攻略記」『ペンで征く』40頁
15 「この眼で見た海鷲の強さ」『ペンで征く』127頁
16 「この眼で見た海鷲の強さ」『ペンで征く』128頁
17 くろがね会編『日本海軍の話』（四方木書房、一九四三年七月）66頁
18 「ペンで征く南方戦線」『ペンで征く』216頁
19 『赤道南下』（中央公論新社、二〇〇三年七月）144頁
20 「黒色の新皇民と宣撫の問題」『ペンで征く』226頁
21 「黒色の新皇民と宣撫の問題」『ペンで征く』228頁
22 『科学知識』（日本科学協会、一九四三年第四号）82頁
23 「空襲都日記」『海野十三全集　別巻2』69頁
24 「空襲都日記」『海野十三全集　別巻2』70頁
25 「空襲都日記」『海野十三全集　別巻2』72頁
26 「海野十三　年譜」『海野十三全集　別巻2』656頁
27 「降伏日記」『海野十三全集　別巻2』78頁
28 「大脳手術」『海野十三全集　第11巻』（三一書房、一九八八年一二月）114頁
29 「降伏日記」『海野十三全集　別巻2』86頁
30 「原子爆弾と地球防衛」『海野十三全集　別巻1』306頁
31 「原子爆弾と地球防衛」『海野十三全集　別巻1』306頁
32 「原子爆弾と地球防衛」『海野十三全集　別巻1』306頁
33 「火星兵団」『海野十三全集　第9巻』（三一書房、一九八九年一二月）427頁
34 「『火星兵団』作者の言葉」『海野十三傑作選③』（沖積舎、二〇一三年十月）3頁
35 「地球発狂事件」『海野十三全集　第11巻』72頁
36 「地球発狂事件」『海野十三全集　第11巻』93頁
37 「解題」『海野十三全集　第11巻』501頁
38 「火星探検」『海野十三全集　第11巻』199頁
39 「驚異の皇化首都」『ペンで征く』148頁

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程三年）